View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

鳴門教育大学研究紀要
第34巻　2019

# 『栄花物語』の叙述方法

## ――道長政権成立までの道筋――

小島明子

（キーワード：王朝歴史物語、人物造型、藤原氏、九条流、後宮）

## はじめに

宇多天皇から堀河天皇に及ぶ十五代の御代、約二百年の天皇家と藤原氏の歴史を編年体形式で綴ってゆく『栄花物語』は四十巻で構成される大部な物語である。さらにこの四十巻も巻三十までの正編と、その後の十巻分の続編からなり、作者も成立年次も異なるとみてよい。正編は、巻一「月の宴」で宇多・醍醐・朱雀三代の天皇の簡略な記事を配した後、村上天皇即位の天慶九年（九四六）四月より本格的な編年体形式での叙述が始まる。天皇家と外戚関係を結ぶ北家藤原氏を順次描出、次第に所謂「九条流」が屹立し、やがて道長が政権を把握して繁栄するさまが詳述され、巻三十「鶴の林」に至って万寿四年（一〇二七）十二月の道長薨去と、道長喪失を惜しむ翌年の記事によって正編は閉じられる。すなわち正編は約百四十年を叙述の範囲とし、後編はそれに続く約六十年を描くものである。

本稿は、正編の中で道長が政治的な権力を確立するまでの物語の叙述方法を検討するものであり、具体的には巻一「月の宴」から巻四「さまざまのよろこび」までを範囲とする。むろん、道長が十全な政治的権力を手中とするのは、その女・彰子が一条天皇との間になした敦成親王が後一条天皇として践祚する長和五年（一〇一六）一月とみなすこともできるのであり、その記事は『栄花物語』では巻十二「たまのむらぎく」に位置する。しかし、巻一～十二までを考察の範囲とする場合、その中でさらに巻を下位分類することが必要となってくると思われ、ひとまずは巻四までを対象とするのが妥当であろうと考えた次第である。複数の巻を縦断した検討によって、一巻ごとの検討では捉えにくい叙述の方法を読み取ってゆく試みとしたい。

## 一　系譜紹介における選択

まず確認しておきたいのが、『栄花物語』における道長に至る九条流の系譜紹介の妙である（論旨理解の補助のため、略系図を提示した）。

巻一「月の宴」は、その冒頭、宇多・醍醐天皇の簡単な記事の後に「そのころの太政大臣」として藤原基経を物語に呼び込むが、すぐにその子息たちの記事に移る。

その基経の大臣、男君四人おはしけけり。太郎は時平と聞えけり。左大臣までなりたまひて、三十九にてぞうせたまひにける。二郎は仲平と聞えける、左大臣までなりたまひて、七十一にてうせたまひにけり。三郎、兼平と聞えける、三位までぞおはしける。四郎忠平の大臣ぞ、太政大臣までなりたまひて、多くの年ごろ過ぐさせたまひける。（巻一〔四〕）[注1]

しかも、基経の四人の子息のうち、兼平のみは大臣に至ることがなかったことが示され、実質的に時平・仲平・忠平の三兄弟が別格の存在として浮かび上がることになる。

続いて村上天皇が描出されるが、それに対応する臣下はこの三兄弟すべてではなく、「ただ今の太政大臣」と忠平のみに焦点が当てられ、再びその子息たちの記事が置かれる。

太郎は今の左大臣にて、実頼と聞えて、小野宮といふ所に住みたまふ。二郎は右大臣にて、師輔の大臣、九条といふ所に住みたまふ。三郎の御有様おぼつかなし。四郎、師氏と聞えける、大納言までぞなりたまひける。五郎、師尹の左大臣と聞えて、小一条といふ所に住みたまふ。（巻一〔七〕）

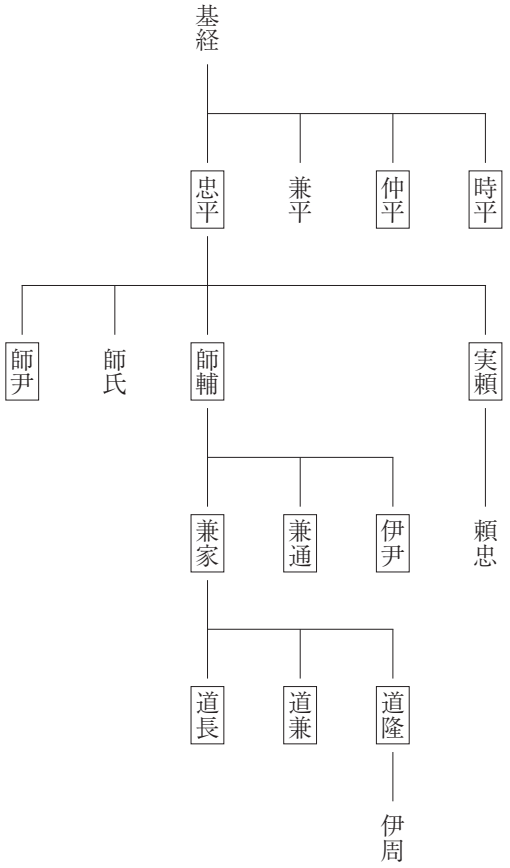
忠平の五人の子息では、履歴がつまびらかではない三郎、および大納言止まりであった四郎・師氏の二人と、他の三人の間にはやはり峻別が働いていて、後者三人については、その流れの由来となる邸宅の名が明示されるのである。加えてこの後のくだりでは、実頼・師輔・師尹の子女が紹介され、またそれぞれの性格が描出されることになる。

その後の巻においては、師輔（九条殿）の三人の子息である伊尹・兼通・兼家、そして兼家の三人の子息である道隆・道兼・道長が物語に登場してくる。つまり系図において人名を□で囲って示したごとく、各世代ごとにそれぞれ三人が選択されている。これはむろん史実の官職を踏まえたものであるが、そこを看過せず掬い上げたのは『栄花物語』の方法とみるべきではないかと考える。

『栄花物語』の後続の歴史物語『大鏡』は、まさしくその点をよく理解していたと思われ、以下の記載をなしている（〔一四一〕[注2]）。

昭宣公の御君達、「三平」と聞こえさすめりしに、この三所をば「三道」とや世の人申しけむ、えこそうけたまはらずなりにしか、とてほほゑむ。

昭宣公（基経）の御君達（時平・仲平・忠平）を巷間で「三平」と呼ぶのに対して、なぜ道隆・道兼・道長の兄弟を「三道」と言わないのかと世継が語るくだりである[注3]。この『大鏡』記事の背後には、『栄花物語』が四世代にわたって、各世代三人にのみ焦点をあてるという叙述における選択をなしていたことが透けて見え、歴史物語間の叙述方法の継承も窺い知れるのである。




## 二　伊尹・兼通・兼家の世代

一章では『栄花物語』の系譜上の選択のあり方を見てきたが、本章では史実の配置に目を転じる。史実の配列は、すなわち時間的な描写ということになるが、『栄花物語全注釈』[注4]『新全集』などが既に指摘するように、史実の年次と相違させたり、類似の記事を集約させたりという方法が多く採用され、後者は「同類項集約方式」と称されるものである。本章以下では、これらの時間的な描写の問題を中心に『栄花物語』の叙述の方法とその意味を考察する。

九条殿すなわち師輔の子息たちの世代を取り上げると、物語に特筆される伊尹・兼通・兼家の三兄弟は、いずれも武蔵守経邦女・盛子を母とする。長男・伊尹は女・懐子を冷泉天皇に配し、師貞親王（のちの花山天皇）・宗子内親王・尊子内親王を得ているが、懐子に関わる『栄花物語』の記載は、史実の年次と比べると齟齬が少なくない。

例えば、懐子の入内時期であるが、『栄花物語』巻一で、康保四年（九六七）五月の冷泉天皇の践祚を描く巻一〔五一〕記事のやや後に、「今年は年号かはりて安和元年といふ」〔五七〕と記され、その二月に懐子の入内記事〔五八〕が続いている。ところが史実では、応和二年（九六二）の『応和二年三月資子内親王歌合』に「御息所懐子」の作者名で歌が記されることが既に指摘されていて、懐子は冷泉天皇が東宮であった時期に既に入侍していたことが明らかである。

また、天禄二年（九七一）に位置する巻一〔七七〕では懐子所生の二人の内親王が以下のように描かれるが、これも史実とは相違する点を複数含む。

摂政殿（伊尹…稿者注）の女御と聞ゆるは、東宮（師貞親王…稿者注）の御母女御におはす、その御一つ腹に、女宮二所生れたまひにけり。されど女一の宮はほどなくうせさせたまひて、女二の宮ぞおはしましける。それは院（冷泉院…稿者注）の位におはしましをりならねど、後に生れたまへる、いみじううつくしげに光るやうにておはしましけり。

『栄花物語』の書きぶりでは、女一の宮・宗子内親王は、女二の宮・尊子内親王より早く世を去ったと読める。ところが史実では、宗子内親王は寛和二年（九八六）七月に二十三歳で薨去、尊子内親王は寛和元年（九八五）五月二十歳で薨去していて、『栄花物語』の記す順とは異なる。また、尊子内親王は康保三年（九六六）生まれであるので、『栄花物語』が記すように冷泉天皇が退位した後の誕生ではなく、東宮時代の誕生である。さらに二人の内親王の誕生年から、先に言及した懐子の入侍は、冷泉天皇が東宮であった時と裏付けられることになる。

これらの『栄花物語』の記載と史実との差異については稿者なりに考えてみたが、明確な理由付けやその効果を未だ見出すことができないでいる。あるいは、こうした年次の不整合は、『栄花物語』が拠るところの原資料の不備あるいは作者の誤認と見なすべきなのだろうか。この疑問に対しては、稿者は否という思いを抱かざるを得ない。

その根拠の一つには、女の入内に関わる兼通・兼家の描かれ方が挙げられる。兼家はその長女・超子を冷泉天皇に入内させるが、これは『栄花物語』では先に引用した記事の少し前の〔七六〕に描出されている。

（兼家には…稿者注）姫君二所おはす。ただ今の東宮（師貞親王…稿者注）は児におはします、内（円融天皇…稿者注）には堀河の女御（兼通女・媞子…稿者注）さぶらひたまふ、競ひたるやうなりとて、冷泉院にこの姫君を参らせたてまつりたまふ。おしたがへたることに世の人申し思へり。

史実では超子の入内は安和元年（九六八）十月、同年十二月には女御となっていて、『栄花物語』の当該記事の年次より三年前、すなわち冷泉天皇在位時である。

一方の兼通の女・媞子の円融天皇入内は、『栄花物語』では〔七三〕記事にあるが、これは天禄二年（九七一）を描く箇所である。

帝（円融天皇…稿者注）、御年十三にならせたまひにければ、御元服の事ありけり。……兼通と聞ゆ、このごろ宮内卿と聞ゆ、その姫君参らせたてまつりたまふ。摂政殿（伊尹…稿者注）の姫君たちは、まだいと幼くおはすれば、え参らせたまはず、いと心もとなく、口惜しく思さるべし。

媞子の入内は、実際には天禄四年（九七三）二月で、これは伊尹が薨去し、兼通が摂政となった天禄三年（九七二）十一月より後のことである。

両者とも小さな年次の相違であるが、二箇所を合わせてみれば、次兄の兼通に配慮して、女を円融天皇ではなく、退位した冷泉院に入内させた兼家と、長兄の伊尹への気遣いは一切なく、円融天皇にいち早く女を入内させた兼通という『栄花物語』の人物造型の対照が鮮やかに浮かび上がる。実際は正反対で、兼家は冷泉天皇の在位中に野心を持って女を入内させ、兼通は伊尹の薨去を待ってようやく女を円融天皇に入内させていたのであった。

こうした年次の組み替えは、巻二「花山たづぬる中納言」に点在する兼通・兼家の人物造型[注5]とも合致し、一貫してなされていると考えられる。延長三年（九二五）生の兼通と、四歳年少の兼家が熾烈な政権闘争を繰り広げたことは歴史的事実であるのだが、『栄花物語』の描写から受ける印象はやや異なるように思われ、以下それを追ってみたい。

天禄四年（九七三）を描く巻二〔六〕記事では、兼家も次女・詮子の円融天皇入内を考えるものの、「中宮（兼通女・媞子…稿者注）かくてさぶらはせたまへば、つつましく思さるるなるべし」と兼通に遠慮する姿が描写される。これは先の箇所とまったく同様の姿勢である。

またその翌年、〔九〕記事では、重ねて兼家の望みが以下のごとく描出される。

東三条殿（兼家…稿者注）は、なほいかでこの中姫君（詮子…稿者注）を内に参らせん、いひもてゆけば何の恐ろしかるべきぞと思しとりて、人知れず思しいそぎけり。……さるべき仏神の御催しにや、東三条殿、なほいかで今日明日もこの女君参らせんなど思したつと、おのづから大殿（兼通…稿者注）聞こしめして、「いとめざましきことなり。中宮（媞子…稿者注）のかくておはしますに、この大納言（兼家…稿者注）のかく思ひかくるもあさましうこそ。いかによろづにわれを呪ふらん」などいふことをさへ、つねにのたまはせければ、大納言いとわづらはしく思し絶えて、さりともおのづからとおぼしけり。

二箇所の傍線部に描かれる兼家の野心は、波線部のように「さるべき仏神の御催し」によるものとしてオブラートに包まれる。それに比して、点線を付した兼通の警戒の言葉は激烈であり、兼家は時期を待つだけの消極的な有様が描かれる。『栄花物語』のこの兼家像は、その妻の手になる『蜻蛉日記』が描く磊落な兼家像、歴史物語『大鏡』・説話集『古事談』『続古事談』[注6]などが描き出す不遜な兼家像とは異質な人物造型がなされるのである。当該箇所については、渡瀬茂氏[注7]・福長進氏[注8]の論が実に説得的で、政治的意欲をむき出しにした兼通と、それが稀薄な兼家という対比構図がまさしく読み取れる。

歴史的には、この後、貞元二年（九七七）十月、兼通による兼家の治部卿への降格がある。これについては『栄花物語』も史実通りに展開する。ただし、円融天皇に兼家の野心を讒奏する以下の兼通の言葉は、先に挙げた他作品には見られず、『栄花物語』独自のものである。

○「東三条の大将（兼家…稿者注）は、『院の女御（超子…稿者注）、男御子生みたまへ。世の中かまへん』とこそ言ふなれ」〔一〇〕

○「この右大将兼家は、冷泉院の御子（居貞親王…稿者注）を持ちたてまつりて、ともすればこれをこれをと言ひ思ひ、祈りをすること」〔一四〕

こうして『栄花物語』には、猜疑心が強く腹悪しき兼通と、忍従の兼家の人間像が刻まれた後、同年十一月の「兼通薨去」と、薨去直前の兼通の奏上によって実現した「頼忠の関白就任」が続く。翌天元十年（九七八）十月の除目では、兼家

も政治的に復権を果たし、右大臣となる。このあたりの事実関係については『栄花物語』も史実に即しているのであるが、兼家復権の理由を「太政大臣（頼忠…稿者注）たびたび奏したまひて」と「これはただ仏神のしたまふと思さるべし」とのごとく、頼忠の助力と神仏の加護の二つを挙げるのは、やはり『栄花物語』〔一八〕特有のものである。

こうして「九条流」の伊尹・兼通・兼家の三兄弟では兼家が生き残るのであるが、この後は、「小野宮流」の頼忠との政治的角逐がクローズアップされることは十分予測される。ちなみに、延長七年（九二九）生の兼家に対して、頼忠は五歳年上であり、当代の円融天皇は、兼家の三十歳年少である。

この頼忠の描写に関しても、『栄花物語』の叙述の鍵の一つとなるのは、またしても時間的な作為で、その第一が、円融天皇後宮への女の入内である。兼通亡き後、円融天皇の後宮には兼通女・媞子が中宮として残されていたが、史実上は次のような経緯を辿る。

①天元元年（九七八）四月　頼忠女・遵子　入内
②天元元年（九七八）八月　兼家女・詮子　入内
③天元二年（九七九）六月　兼通女・媞子　崩御

まずは上位者の関白・太政大臣の頼忠の女が入内し、続いて右大臣兼家の女がその後塵を拝するという自然な流れである。

ところが『栄花物語』は、この順番を組み替えて①を②③の後ろに置く。その結果、③中宮・媞子の崩御記事（巻二〔二一一〕）の前に、以下の②詮子入内記事〔一九〕のみが残ることとなった。

大殿（頼忠…稿者注）の、姫君をこそ、まづと思しつれど、堀河殿（兼通…稿者注）の御心を思しはばかるほどに、右大臣（兼家…稿者注）はつつましからず思したちて、参らせたてまつりたまふ、ことわりに見えたり。……中宮をかくつつましからず、ないがしろにもてなしきこえたまふも、昔の御情なさを思ひたまふこそはと、ことわりに思さる。

引用部の中略箇所をはさんで前半と後半、ほぼ同内容が繰り返されるが、兼通への恩義から女の入内を躊躇する頼忠と、兼通への遺恨から女の入内を進める兼家の対比が明白な物語構成となっているのである。

『栄花物語』の時間的な作為として、第二には頼忠女・遵子の立后に関わる箇所が挙げられよう。天元三年（九八〇）六月、詮子から円融天皇の第一皇子・懐仁親王が誕生するものの、皇子女を生んでいない遵子に、円融天皇から立后の内意がもたらされるくだり（巻二〔二九〕）である。これは『栄花物語』では天元四年（九八一）に位置する。

大臣（頼忠…稿者注）、なまつつましうて、一の御子生れたまへる梅壺（詮子…稿者注）を置きてこの女御（遵子…稿者注）のゐたまはんを、世人いかにかは言ひ思ふべからんと、人敵はとらぬこそよけれなど思しつつ過ぐしたまへば、「などてか。梅壺（詮子…稿者注）は今はとありともかかりとも、かならずの后なり。世も定めなきに、この女御の事をこそ急がれめ」と、つねにのたまはすれば、うれしうて人知れず思しいそぐほどに、今年もたちぬれば、口惜しうおぼしめす。

実際のところ遵子立后は天元五年（九八二）三月十一日であり、『栄花物語』もそれを年次通り記している。しかし、円融天皇の内意が頼忠に伝えられたのは、『小右記』によれば同年の二月二十日らしく、[注9]『栄花物語』の記事は年次を繰り上げていることがわかる。これにより、なまじ遵子立后の帝の内意を早々に受けたが故に、悶々とした思いに苛まれる頼忠の姿が浮かび上がるのである。

第一と第二の箇所を合わせみれば、『栄花物語』では、頼忠は兼家の「敵」としては造型されていないことが窺い知れるであろう。九条流ではない自分に関白を譲った兼通や、本来は関白が回ってくるはずであった兼家、そして「世人」にまで遠慮する姿、それでも当然ながら女の立后を切に願わずにはいられない姿が『栄花物語』の中に描出される。

これに比して、非難の対象となるのは円融天皇である。遵子立后記事の後の〔三二〕には兼家の強い怨嗟の気持ちが描かれる。

この御事を世人も見思ふらんことと、なべての世さへめづらかに思しめして、かの堀河の大臣の御しわざはなににかありける、こたみの帝の御心掟は、ゆゆしう心憂く思ひきこえさせたまふもおろかなり、……

自身につらく当たった兼通の仕打ちより、今回の円融天皇の決定こそが問題であり、恨めしく思われるというもので、以後、兼家の一門は出仕もせず、詮子も円融天皇と疎遠になりがちとの描写を続ける。また、「帝の御心掟を、世人も目もあやにあさましきことに申し思へり」「かく御子もおはせぬ女御の后にゐたまひぬること、やすからぬことに世の人なやみ申して、素腹の妃とぞつけたてまつりける」（〔三一〕）と、「世人」「世の人」の批判も各所に配されている。

つまり、兼通の薨去後の『栄花物語』の叙述は、円融天皇の外戚でないにもかかわらず摂関の地位に就かざるを得なかった頼忠の不幸を顕在化させていたと言うことができよう。『大鏡』（〔六六〕）が、こうした頼忠を「よそ人」「よその人」と秀逸な呼び方をしていることは周知のことであるが、『栄花物語』はこの呼称

を用いることはないものの、『大鏡』の書き残す逸話とは異なる方法、すなわち時間の組み替えを基盤にした叙述で頼忠の悲哀を描出したのである。

そして同時に『栄花物語』は、円融天皇と兼家の対立を明確に語ることで、よき「後見」を得ることができなかった、あるいは「後見」の選択を誤った円融天皇の不幸をも炙り出してもいるのであった。

## 三　花山天皇の御代

円融天皇と兼家の対立は、永観二年（九八四）八月、円融天皇の譲位によって解消する。冷泉天皇と伊尹女・懐子の間に生まれた東宮・師貞親王が花山天皇として即位、新東宮には兼家女・詮子の生んだ懐仁親王が立つ。時に、花山天皇十七歳、懐仁親王五歳である。ただ花山天皇の御代はわずか二年弱で、寛和二年（九八六）には懐仁親王が一条天皇として即位するのであり、花山天皇の御代で『栄花物語』が着目するのもその後宮のみである。

史実を先に押さえておけば、後宮には次のように女性たちが参入した。

①永観二年（九八四）十月十八日　為光女・低子　入内
②永観二年（九八四）十二月五日　朝光女・姫子　入内
③永観二年（九八四）十二月十五日　頼忠女・諟子　入内
④寛和元年（九八五）十二月五日　為平親王女・婉子女王　入内

ところが『栄花物語』ではこの年次がまたしても入れ替えられる。永観二年八月の花山天皇践祚記事が巻二〔三九〕にあり、直後の〔四〇〕記事で花山天皇自身の入内要請が「さべき人々の御女どもを気色だちのたまはす」と語られ、③諟子入内が「前を払ひ、われ一の人におはしませば、さはいへど御心のままに思し掟つるもあるべきことなりとぞ見えたる」と続く。このあたり『栄花物語』が頼忠の野心を描くとも思われようが、前章の検討を思い起こせば、花山天皇に対しても外戚ではない頼忠の必死さの強調とも読めるものである。

続いて、④婉子女王入内が簡単に語られ、②姫子入内に至る。姫子への花山天皇の寵愛は最初の一箇月ほどは水も漏らさぬほどであったが、翌寛和元年（九八五）にはそれが跡形もなく消えてしまったとされる。ここでようやく物語に登場するのが、①の低子である。これもまた花山天皇の寵を一身に集め、懐妊までするが、病を得て薨去、低子喪失の悲しみが花山天皇の「自発的な」出奔・出家・譲位を招くというのが『栄花物語』の描くところである。

再び史実を参照すれば、女御低子の薨去は寛和元年（九八五）七月、花山天皇が宮中から姿を消し、落飾するのが翌寛和二年（九八六）六月である。すなわちその間には、一年弱の時間が空いているのみならず、先に④として挙げた寛和元年十二月の婉子女王入内までもがなされている。歴史的な時系列では、愛しい女性の死を契機に出家するという『栄花物語』の描こうとする花山天皇像は到底なり立ち得ない。『栄花物語』の年次変更の理由は、それが作り出そうとする世界と密接に絡み合っていることが改めて如実に窺い知れるものである。

さらに花山天皇出家は『大鏡』『古事談』『愚管抄』[注10]などによれば低子の死に誘発されていることは疑いないが、直接的には躊躇する天皇を巧みに連れ出した道兼（兼家男）の「すかしおろす」行為（『大鏡』〔一六三〕）に拠るところ大である。しかしながら、『栄花物語』は道兼の関与を記さない。あくまで花山天皇の深い嘆き故の出家であったとするのだが、それは年次の組み替えによって十分説得的なものとなり得たのである。

実は、この箇所で道兼を描かなかった理由についてはさらなる読みが可能であると思われるが、それは論述の都合上、次章に回すこととする。

## 四　道隆・道兼・道長の世代

『栄花物語』巻三「さまざまのよろこび」は、兼家の摂政就任から筆をおこし、その子女たちの繁栄が物語られ、殊に時姫腹の三兄弟の道隆・道兼・道長については、その人柄・容姿・結婚などが詳述される。これについては、『新全集』（①一四五頁）の頭注が「並記することによって、道長の卓抜性を相対的に浮かび上がらせる」とし、さらに巻一には同様に実頼・師輔・師尹の三人の描写がなされていたことから、「巻三にもこのような叙述が導入されていることは、九条流発展史として始発した『栄花』の歴史叙述が、道長の栄華の物語へと据え直されていることの徴表とみられる」と指摘する。物語の大筋を読み解く明晰な分析であるが、本章はこれを継承しつつ、叙述方法の細部についてさらに検討を進めたい。

その際、分析の視点として「九条家内部の人物同士の結びつきの強弱関係」を挙げ得るのではないかと考えている。これによれば、道隆・道兼・道長の三兄弟は、「道隆」と「道兼・道長」に二分して捉えることができると思われる。

まず道隆であるが、父の兼家に対して粗略とも見える性格付けが描出される記事があることは見逃せない。その第一は、一条天皇に入内させた定子の立后に関するもので、史実は次のような流れとなっている。

①正暦元年（九九〇）二月　定子、女御となる

② 同年　五月　兼家病のため出家、道隆、摂政となる
③ 同年　七月　兼家薨去
④ 同年　十月　定子立后

ところが『栄花物語』は④定子立后を六月として、③兼家薨去の記事の前に描いた。そのため立后記事〔五三〕には、「世の人、いとかかるをり過ぐさせたまはぬをぞ申すめる」と、女の立后を急ぎ、父親の病中に晴れがましい儀を挙行した道隆への「世の人」の批判が付加されている。

第二は、兼家の寵臣・有国への道隆の仕打ちである。巻三〔三一〕の兼家六十賀の記事で「有国、惟仲を大殿（兼家…稿者注）いみじきものに思しめしたり」と紹介される有国について、巻三〔五五〕では、「有国は、粟田殿（道兼…稿者注）の御方にしばしば参りなどしければ、摂政殿（道隆…稿者注）、心よからぬさまに思しのたまはせけり」と道隆の複雑な心情が描かれる。[注11] やがて巻四〔四二〕は、「入道殿（兼家…稿者注）うせさせたまひて二年ばかりありて、有国をみな官位もとらせたまひて、押い籠めさせたまひてし」と、有国が道隆によって除名されたことが物語られる。なお有国の除名は、実際のところ正暦二年（九九一）二月で、道隆薨去の七か月後であった。さらには道隆の死後、有国が政治的復権を果たし、大宰大弐として下向するという以下の巻四〔七五〕記事にも、道隆の行為が繰り返し語られている。

故殿（兼家…稿者注）のいとらうたきものにせさせたまひしを、故関白殿（道隆…稿者注）あさましうしなさせたまひてしかば、めやすきことと、世の人聞え思ひたり。

有国の復権に対する「世の人」の思いも加えて、道隆の人物像を物語るために『栄花物語』が有国の扱いを一連で取り入れたことが窺い知れるのである。

つまりこの二つの記事群から、『栄花物語』が描出した道隆像は明らかであろう。実父・兼家の喪さえはばかることのない人物、父の生前の思いを尊重しない人物として道隆は『栄花物語』の中に位置づけられているのである。

蛇足ながら付言すれば、道隆はその岳父にも難点があることが描かれている。道隆の正室は高階貴子、その父・成忠については「高二位とぞ世には言ふめる、年老いたる人の、才かぎりなきが、心ざまいとなべてならずむくつけく、かしこき人に思われたり」と巻三〔五八〕に登場する。貴子の同母兄弟は受領として重用されることになるが、それに対して『栄花物語』は「人やすからずもと、やむごとなからぬ御仲らひを、心ゆかず申し思へり」との「人」の非難の声を添えてもいる。

他方、道兼・道長にはこうした姻戚に関する問題はない。道兼の正室の父は、師輔の男・遠量であるから九条流の一人である。また道長正室・倫子は源雅信（宇多天皇の皇子・敦実親王の男）の女で、非常に高貴な血筋となる。歴史上、兼家・道隆あたりまでは受領階級の女も摂関家の正室となっているが、それ以降はそれは難しくなっているのであり、『栄花物語』でも道隆の結婚はマイナスの要素を帯びたものという扱いで、この後も高二位・成忠についての『栄花物語』の描写は辛辣を極める。

上述のごとく亡き父・兼家に対して「不孝」とも言える態度が描かれる道隆に、道兼・道長はともに批判的な立場をとっている。先に引いた巻三〔五三〕定子立后の後には、道長が中宮大夫に任じられたことが記されるが、そこには「こはなぞ、あなすさまじと思いて、参りだに参りつきたまはぬほどの御心ざまもたけしかし」と道長の強い反発が記される。[注12] また、先に挙げた巻四〔四二〕の有国の除名の記事にも、「粟田殿も大納言殿も、心憂きことに思しのたまはす」と道兼・道長が連名で登場し、道隆のなした処分に批判的であったことが語られている。

当の道隆は長徳元年（九九五）四月薨去、跡を襲い関白となった道兼もまた病に倒れるが、巻四〔六四〕には道長とその同母姉妹の詮子の心痛と配慮が以下のように描かれるのである。

女院（詮子…稿者注）よりも御使隙なし。大将殿（道長…稿者注）はたあはれに思しあつかはせたまひて、御誦経によろづの物運び出でさせたまふ。

この直後、道兼は臨終を迎え、これまで見てきた道兼・道長の関係が重ねて描出される。

左大将殿（道長…稿者注）は……さらに夢とのみ思さる。あはれに思ほしきこえさせたまへりける御仲なれば、ゆゆしとも思さずあつかひきこえたまへる、悲し。同じ御はらからと聞ゆべきにもあらず。關白殿（道隆…稿者注）うせたまへりしに、御とぶらひだになかりしに、あはれに頼もしうあつかひきこえたまひつる……（巻四〔六五〕）

傍線部のごとく道隆の薨去時には弔問すらしなかったことに比して、道兼の弔いには死の穢れを厭うこともない道長の姿が繰り返されるのである。『栄花物語』は道兼・道長の結びつきの強さを打ち出していると[注13]言ってよかろう。

これらの叙述から、同母三兄弟が明白に「道隆」と「道兼・道長」の二群として扱われることが見て取れるのであるが、当然ながら道兼と道長は同等の扱いにはなっていない。「七日関白」と称されるように関白の座に就くや程なく世を去った道兼と、長期政権を誇った道長の寿命の相違は歴史的事実であるから、これ

を動かすことはできないにせよ、『栄花物語』はそれぞれの属性で二人の差異を示しているのも確かである。

巻三においては、道隆が「御かたちも心もいとなまめかしう、御心ざまもいとうるはしう」（〔一〇〕）、道長は「御かたちよりはじめ、御心ざまなど、兄君たちをいかに見たてまつり思すにかあらん、ひきたがへ、さまざまいみじうらうらうじう、雄々しう」（〔一二〕）と描かれるのに対して、道兼への評価はかなり手厳しい。

御顔色悪しう、毛深く、ことのほかにみにくくおはするに、御心ざまいみじうらうらうじう雄々しう、け恐ろしきまでわづらはしうさがなうおはして、中納言殿（道隆…稿者注）をつねに教えきこえたまふ……。（〔一一〕）

ただし、『大鏡』（〔一五九〕）には、病中の道兼に対面した実資が「御色も違ひて、きららかにおはする人ともおぼえず」と語ったとの逸話があるのであるから、『栄花物語』の描く道兼の容姿には疑問も生じてくる。その醜悪なさまは、道長と道兼の差異強調のための『栄花物語』の作為の可能性も考えられてくるのである。

むろん二箇所の波線部のように、道兼・道長両者の性格描写で共通項があるのは、「道兼・道長」を一組として捉える立場からは看過できないのであるが、波線部以外の兼通の描写はプラス評価とは言い難い。また引用部に続けて、正室でない藤典侍（繁子）腹に女がいたのにもかかわらず「何とも思さず」、北の方腹の姫君の誕生のみを切望したというくだりがあるのは、二世代を遡った師尹の性格描写を想起させるのも興味深い。小一条流の師尹は、「知る知らぬほどの疎さ睦まじさも、思し思さぬほどのけぢめけざやかになどして、くせぐせしうぞ思し掟てたりける」（巻一〔一八〕）とされ、人への対応に親疎・好悪が激しいと言われていたが、道兼もまたそれに類する属性が付与されていたことがわかる。

では、「道隆」に対して「道兼・道長」の構図を『栄花物語』が導入している意図はどのようなものであろうか。

一つには、狷介な人物として造型された道兼とも兄弟の親しい睦びをなし得る道長の美質を語ることができることが挙げられよう。九条流の祖・師輔が「おいらかに、知る知らぬわかず心ひろくなどして、月ごろありて参りたる人をも……いと心やすげに思し掟て」（巻一〔一八〕）とされ、衆望を集めた有様がここで呼び起こされることになるのであった。

今一つには、道兼から道長への政権の移譲が円滑であったと綴るために、『栄花物語』が布石を打ったとみなすこともできよう。

この粟田殿の御事の後より、五月十一日にぞ「左大将天下及び百官施行」といふ宣旨下りて、今は関白殿と聞えさせて、また並ぶ人なき御有様なり。女院も昔より御心ざしとりわききこえさせたまへりしことなれば、年ごろの本意なりと思しめしたり。（巻四〔六九〕）

つまり、道兼薨去後、道長に問題なく政権委譲がなされたとするのが『栄花物語』[注14]であり、そこに道長の同母姉で一条天皇母后の詮子の安堵も書き加えられている。『大鏡』には、定子への愛情からその兄の伊周を捨てがたく思い、道長に宣旨を出し渋る一条天皇を強硬に説得し、道長への宣旨を勝ち取る詮子を活写する記事（一八〇）があるが、『栄花物語』は道兼・道長の権力移譲の自然さを示す記事をここに至るまでに周到に積み上げる方法を採った。『大鏡』が語るような詮子のめざましい活躍は、『栄花物語』では必要とされなかったのである。

ここで想起したいのは、花山天皇退位のくだりである。『大鏡』では花山天皇を欺き、巧妙に出家へ導いたのは道兼であり、それを画策したのは父の兼家であるとされ、かつまた、その功績に報いることなく、関白を道隆に譲ってしまった兼家を恨み、喪に服することもなかった道兼が描かれる。ところが『栄花物語』は、この事件への兼通の関与を明示しなかったことは前章で述べた通りである。ここには、『栄花物語』の以下のような意図が読み取れよう。九条流の主筋は、兼家からひとたびは道隆に引き継がれたものの、父への「不孝」故に道隆はその地位を保ち得ず、やがて道兼を経て道長へなだらかに継承された――そうした構図が『栄花物語』の打ち出そうとするものであると思量されるのである。それに連動して、道兼の暗部は封印されたと考えるのが妥当ではないだろうか。

## 五　伊周の扱い

道長が内覧の宣旨を賜ることで政権の行方は確定したが、所謂「中関白家」の人々は、道隆男の伊周こそが摂関家の正当な継承者であるとの思いを抱き続けたであろう。ただし『栄花物語』がこの伊周に関しても、その不適格性について丁寧に描写を重ねていることに着目したい。

まずは巻三、『栄花物語』に初めて道隆の子息が登場する。

この中納言殿（道隆…稿者注）の御外腹の太郎君、大千代君と聞こゆるを、摂政殿（兼家…稿者注）とりはなち、わが御子にせさせたまひて、このごろ中将など聞ゆるに、嫡妻腹の兄君を小千代君とつけたてまつりたまへり。（〔一〇〕）

道隆の長男・大千代君（道頼）は、正室の高階貴子腹ではなかったが、それを祖

父にあたる兼家が養子として引き立てたとする。一方、貴子は道隆との間に三人の男子をなすが、その年長の男が小千代君（伊周）である。

道隆の息子と言えば一般には伊周・隆家が一対として挙げられることが多く、『栄花物語』も巻が進むにつれ、そうした叙述に移り変わってゆくのではあるが、巻三・巻四で対となって描き出されるのは、この道頼と伊周である。次の巻三〔一五〕からは、『栄花物語』が設定した二人の関係性が端的に窺い知れる。

この大千代君は、国々あまた知りたる人の、山井といふ所に住むが、女多かるが、婿になりたまひぬ。三、四の宮をばさらにも聞えさせたまはず、大殿（兼家…稿者注）、この君をいみじく思ひきこえさせたまへり。大納言殿（道隆…稿者注）、これをばよそ人のやうに思して、小千代君を、いかでいかでこれ疾くなしあげんとぞ思しためる。

祖父であり、養父である兼家の慈しみをを受ける大千代君（道頼）と、父道隆の鍾愛の小千代君（伊周）の対比が際立つ。しかも道頼に注がれる兼家の愛情は、冷泉天皇と兼家女・超子との間に誕生した為尊親王（三の宮）・敦道親王（四の宮）と並記されているほどである。他方、道隆にとっては道頼は「よそ人」の扱いであったとされる。

従って、兼家薨去時には「今は小千代君に劣らんことを、さまざまとり集め思しつづけ嘆かせたまふもあはれなり」と、道頼の嘆きが描かれることになる（巻三〔五四〕）。その後も『栄花物語』は、任官の事実を反映しながらも、年次は実際より一年遅い正暦四年（九九三）に伊周の任大納言（巻四〔三〇〕）置く一方、史実より一年早めた同じ正暦四年に伊周の任内大臣（巻四〔四〇〕）記事を配している。

それに対して、道頼は史実に即して正暦五年にようやく大納言となったとされる（〔四九〕）が、そこには「山井は、故殿の御心掟思し出でて、大納言になしきこえたまへり」と、道隆が亡き父・兼家の気持ちを思い出し、道頼の任大納言をなしたという記載が添えられる。前章で、生前の兼家の思いを斟酌することのなかった道隆の姿を読み取ってきたが、ここはそれに反する書きぶりである。ただ『栄花物語』世界の正暦五年時点では、もはや道頼の官職や社会的立場は伊周の下位に確定している。あくまでその範囲内での道隆の道頼に対する温情に過ぎないので、『栄花物語』もこのように描いたとみなせば、これまでの描写と著しい不整合をなすとは言えまい。

『栄花物語』が、中関白家においてそれほど重要な存在ではない道頼を、繰り返し伊周と対比させて描いた理由は、前章で導いた結論と同様であろう。兼家の流れを受け継ぐのは、「道隆―伊周」父子ではなかったことが、道頼の描写を通じても語られているのである。

しかも、道頼は長徳元年（九九五）四月十日の道隆薨去からわずか二か月後に世を去っている。『栄花物語』は史実通り道頼の死を描くのであるが、その記事〔七〇〕は如上の読みをさらに裏付ける。

ただ今人にほめられて、ようおはしける君なれば、今の関白殿（道長…稿者注）も、この君をば故殿（兼家…稿者注）の子にせさせたまひしかば、われもとりわき思はんとしつるものをと口惜しう思されけり。

道長こそが兼家の思いを継ぐ人物であることがここでも繰り返されているのであり、見過ごせない箇所である。

ここまで「道隆―伊周」父子の系譜上から、伊周が兼家の後継者としての適格性を欠くことを示唆する記事を挙げてきたが、『栄花物語』は露骨にその人格的なマイナス面を描出してもいる。その一つが、道隆の薨去後、政権の行方をめぐって「世の人、世のはかなさよりもこれを大事にざざめき騒ぐ」との記載のあと、伊周のさまが描かれる巻四〔五五〕である。

内大臣殿（伊周…稿者注）は、ただわれのみよろづにまつりごち思いたれど、おほかたの世に、はかなううち傾きいふ人々多かり。……かかる御思ひなれど、あべき事どもみな思し掟て、人の衣袴の丈、伸べ縮め制せさせたまふ。ただ今はいとかからで、知らず顔にても、まづ御忌のほどは過ぐさせたまへかしと、もどかしう聞え思ふ人々あるべし。

「世の人」「人々」の懸念・批判の声をよそに、自身は執政をなしているつもりであるとの言も皮肉が効いているが、特に傍線部は父の喪中に服装の制を新たに出すという政治感覚の欠如を鮮やかに描き出す。しかも、道隆喪中の伊周の行為は、兼家喪中の道隆の行為とパラレルに対応している点も『栄花物語』の意図を感じさせる。なおこの傍線部については、『編年小右記目録』長徳元年七月十五日条の以下の記事を参照する必要があろう。

御衣袖令二縫縮一給事〈公卿衣袖同レ前拠二宣旨一也、一尺八寸〉[注15]

道隆の薨去は四月十日であり、道長が内覧を賜るのが五月十一日、そして氏長者・右大臣となるのが六月十九日である。七月十五日ならば、既に伊周がこうした制を行うことはあり得ないのであり、ここは『栄花物語』が主体を伊周に移し替え、伊周の人物像の強調をなしたとも考えられるのである。

また、少し年次は遡るが、関白が道兼に定まり、失意の伊周が描かれる巻四〔六二〕の場面も印象的である。

あさましう人笑はれなる御有様を一殿の内、思ひ嘆き、掻膝とかいふさまにて、「あないみじの業や。ただもとの内大臣にておはせまし、いかにめでたからまし。何のしばしの摂政。あな手づつ、関白の人笑はれなることを、いづれの児(ちご)かは思し知らざらん」と、ことわりにいみじうなん。

父・道隆の病中、なまじ一時的に内覧をしたことさえ、今となっては体裁が悪く、「児」に至るまでそれを笑っているだろうと「掻膝とかいふさま」で嘆く伊周は、殊更に「児」めき、矮小化して描かれていることは明らかである。

さらには、道兼が関白就任後、なすすべのない伊周が母方の祖父・高階成忠に祈祷させるくだり（〔五八〕）、また当の道兼が亡くなると「後は知らず、程なう世を見あわせつるかな」とその祈りの成果に喜悦する伊周が描かれるくだり（〔六六〕）もある。これ以降も、『栄花物語』中で成忠の不気味な祈祷は折々に点描されるが、それにひと筋に頼みをかける伊周の姿はまさしく戯画という趣がある。

道長が内覧の宣旨を賜ったことをもって政権の趨勢は確定した。対抗馬と呼ぶにはあまりに無力で無見識な伊周の姿が巻四において点描され、兼家の後継者が、「道隆―伊周」父子ではないことが念押しのごとく語られていることが読み取れるのである。

## おわりに

以上、道長の祖である九条流の代々の人物の動向から、道長が政権を握るまでを描く巻一～巻四に焦点をあて、その歴史叙述の方法を読み解いてきた。その結果、いくつかの叙述の特徴を指摘し得た。まずは、一族の同世代の多数から、三人の重要人物を取り出し対比的に描く手法である。次に、歴史的な事実の細かな年次の入れ替えをなすことで、ある人物の造型を特定の方向に強調する方法が挙げられる。さらには、政権を担うに価する人物には、その直系尊属の意思の尊重や「孝心」が求められ、その条件を満たさない人物は淘汰されてゆくという史観に基づく叙述のあり方である。そしてその史観を「世人」「世の人」「人々」が支持するというかたちが用いられているのであった。

ただし正編はいくつかの巻群に分けられ、それぞれの叙述方法に顕著な相違を有することは、夙に指摘がなされるところである。[注16] 本稿で析出した叙述方法が『栄花物語』の歴史叙述を解明する重要な切り口となることは疑いなかろうが、それが巻五以降、如何に継続されるか、あるいは如何に変容してゆくのかについては、今後さらに検討を重ねてゆきたいと考える。

## 注

（1）本文の引用は、山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進校注『新編日本古典文学全集　栄花物語①～③』（小学館、一九九五～九八年）により、一部表記を私に書き換えた。なお、引用にあたって同書の章段番号を〔　〕に入れて提示した。本稿では、『新全集』と略して示す。

（2）本文の引用は、橘健二・加藤静子校注『新編日本古典文学全集　大鏡』（小学館、一九九六年）により、一部表記を私に書き換えた。なお、引用にあたって同書の章段番号を〔　〕に入れて提示した。

（3）桜井宏徳『物語文学としての大鏡』（新典社、二〇〇九年）第八章「道長と話型　―貴種流離譚と末子成功譚における「心魂」の機能―」（初出は二〇〇六年）もこの点を考察する。

（4）松村博司『栄花物語全注釈一～八・別巻』（角川書店、一九六九～八二年）。

（5）巻二に関しては、安西迪夫『歴史物語の史実と虚構　―円融院の周辺―』（桜楓社、一九八七年）第一篇六「『花山たづぬる中納言』考　―天元年間の記述―」（初出は一九七七年）、「福長進『歴史物語の創造』（笠間書院、二〇一一年）第Ⅰ部第八章「『花山たづぬる中納言』巻について」（初出は一九八八年）、歴史的な背景に関しては、高橋照美「兼通と兼家の不和―「官位の劣り優り」の背景―」（『立命館文学』六三〇号、二〇一三年三月、六一四～六二四頁）などに詳しい。

（6）『大鏡』〔一三三〕〔一三五〕。また『古事談』巻一―二三・巻一―二四、および『続古事談』巻一―一八。後者については、川端善明・荒木浩校注『新日本古典文学大系　古事談・続古事談』（岩波書店、二〇〇五年）の章段番号による。

（7）渡瀬茂『栄花物語新攷』（和泉書院、二〇一六年）第四章第四節「政治的意志の否定」（初出は一九八六年）。

（8）注（5）福長著書。

（9）天元五年二月廿三日条に「参四条殿、々下被参式、即候御共、皇后事有御気色之由、蜜云々(ママ)有被仰事、是去廿日少将命婦所告、仍与禄云々」とある。本文の引用は、東京大学史料編纂所編『大日本古記録　小右記　一～十一』（岩波書店、一九五九～八六年）による。

（10）『大鏡』〔二一〕〔二三〕〔一六三〕、『古事談』巻一―一九・巻一―二〇、巻一―二一、『愚管抄』巻三「花山」。

(11) 道隆が有国を冷遇した理由について、『古事談』巻二―六九、『江談抄』一―三二は、有国が兼家の後継者として道兼を推したためと具体的に記している。『江談抄』は、後藤昭雄・池上洵一・山根對助校注『新日本古典文学大系　江談抄・中外抄・富家語』（岩波書店、一九九七年）の章段番号による。

(12) 注（5）福長著書もこの箇所での道長の反応について、道隆が行った定子立后の時期ややり方に対する不満として読み取り、詳細に考察している。

(13) 道兼と道長の仲を語るものは少ないが、『江談抄』巻一―三三には、有国が道兼に道長への譲状を書くことを勧めたものの、道兼はそれを拒んだという逸話がある。

(14) 『栄花物語』巻四〔六九〕では道兼薨去の後、道長が関白となったと書かれるが、実際は「内覧」に就任した。この後も巻四〔七〇〕に「今の関白殿」のように記されるが、史実上、道長は一度も関白となっていない。なお、道長は摂政には後一条天皇の御代に就いている。

(15) この部分『小右記』は目録のみが現存する。引用は注（9）と同。小書の本文は〈　〉に入れた。

(16) 山中裕『歴史物語成立序説』（東京大学出版会、一九六二年）第三章第二節「栄花物語の成立順序について」（初出は一九五八年）。

# Descriptive Techniques in *Eiga Monogatari* :

## The Path towards the Formation of the Fujiwara no Michinaga Administration

KOJIMA Akiko

Covering a period of about 200 years in chronological order, *Eiga Monogatari* is a tale (*monogatari*) that relates the history of the imperial family and their maternal relatives, the house of Fujiwara. The central theme of the tale is the political splendour (*eiga*) of Fujiwara no Michinaga, which has been vividly portrayed. This paper focuses on volumes 1–4 of the book, which trace the movements of Michinaga's ancestors, the Kujō-ryū, down the generations, up to the point where Michinaga takes power. In addition, the author attempts to clarify the tale's methods of historical description. In doing so, the author of this study has succeeded in pointing out a number of distinctive descriptive features in the tale. First, there is the technique of picking out three important members of the same generation from the numerous other people in their family and depicting those three in a comparative manner. Second, we mention the technique of stressing the characterisation of the three specified individuals by placing historical events in a finely delineated annual chronology. Third, we observe that individuals are portrayed on the basis of a view of history which requires those deemed worthy of governmental authority to display qualities such as respect for the intentions of their lineal ancestors and filial devotion (*kōshin*), while those individuals who fail to meet these requirements are weeded out of the story. The above-mentioned points may be regarded as an important new approach towards elucidating the description of history throughout all the 40 volumes of *Eiga Monogatari*.